

留学先国名 : フィンランド

留学先学校名 : Åbo Akademi University

留学期間 : 平成 28 年 8 月 28 日 ~ 平成 29 年 5 月 15 日

【留学の成果】

日本の教育に漠然とした疑問を抱き続け、教師になることを夢見てきた私は、「教育先進国」フィンランドの学校教育制度を実際に目の当たりにし、フィンランドの教育水準の高さは教師の質の高さに由来するものだと再認識しました。さらにフィンランドの教師と比較することにより、職業としての日本の教師のあり方を見直すことができました。

教師の質が高いのは、教師を目指す生徒は皆、時間をかけて高度な養成プログラムを受けるからです。入学初年度から現場に投げ出され、手探り状態から実習を始めますが、実践と理論を交互に繰り返し、失敗を重ね、その度に自己分析をし、経験のある現役教師からも細かいフィードバックをもらうことで教師としてのスキルを磨き上げていきます。教員免許を取得する頃には経験と自信に満ちたプロの教師として、現場に立つことになるのです。

私は、教師（特に小学校教諭）の質の高さというのは、教師が生徒たちのファシリテーターとしてうまく働けるかどうかにかかっていると思います。知識や技能を生徒に教え与えることだけではなく、一人の人間としての生徒の生きる力を最大限に引き出してあげるのが教師の役目でもあります。その力とは考える力や問題解決能力かもしれません。好きなこと、興味のあることを一生懸命にやる力かもしれません。

それを実践するためには、生徒の持つ性格や個性、背景を理解した上で個々に対応できるファシリテーションを考えていくことが理想とされます。フィンランドでは他の国から移住してきた生徒も多く受け入れますから、文化背景、宗教観など実に多様な面から生徒と触れ合うこととなりますが、そのような難しい状況でも生徒たちの可能性を最大限に引き出すために彼らの立場に立って一人ひとりと向き合っていきたいという真摯な姿勢はどの教師も共通して強く、姿勢だけでなく実際にそのスキルを伴っていました。例えば私が教育実習をした Oveningskola では、兼ねてから移民教育に興味があったのでイクアドルから移住したばかりの生徒の個人授業(スウェーデン語の補講)にお邪魔させていただきました。まず先生は簡単なスペイン語を話したりして生徒との心理的距離を近づけました。その生徒は本を読むことが好きだったので、スウェーデン語の簡単な本を持ってきて、ストーリー構成の勉強をさせていました。好きな本についての雑談も挟みながら、その教師があらかじめその生徒が何に興味があるかをリサーチし一生懸命その生徒だけのために教材を準備しているのだとわかりました。

他にも、Oveningskola のある女性教諭の方が、「シェアの精神」が大事だと教えてくださいました。彼女は、「私は生徒に隠し事をしたくないと思っています。授業の初めにはまず、授業内でやるタスクをすべて前の黒板に書いて示しておくことで情報のシェアをし、時間がある時には私の身の上話を生徒にします。恥ずかしいことも、辛いことも、すべてシェアをします。私が全力でぶつかり、すべてをさらけ出すと、生徒はそ

れを敏感に感じ取ってくれます。生徒は相手のありのままが見えると安心し、こちらにも心を開いてくれるので、より生徒のことを理解しやすくなります。」と言いました。生徒の素敵なおところや得意なものを見つくとそれをみんなにシェアをし、彼らに「小さな先生」になってもらうことで生徒の承認欲求を満たしていくといった方法をとる時もあるそうです。

そういった先生のためめ努力の結果、フィンランドの多くの学校が生徒だけでなく保護者・地域との強い信頼関係をも築くことに成功しています。フィンランドでは学校運営方法・教育手段などについては各学校に委ねられているので、学校現場から出た意見や不満はすぐに見直され、反映、改善されます。その透明性の高さや迅速な対応により学校は保護者・地域からの信頼を獲得しており、学校側が成そうとしている大きなチャレンジや改革に対しても温かい声援をもって見守ってくれるそうです。例えば小学校一年生からノコギリなどの工具を使った技術の授業が実現されているのはその成果だと言えます。

留学中には Vaasa の小学校 Oveningskola にて私も教育実習を受けることができ、一実習生として日々の教師の仕事ぶりや他の実習生の頑張りを観察しに毎日のように学校に赴きました。私も実際に日本語、日本文化の授業、工作や音楽の授業を合わせて約 10 回実施しました。日本語の授業ではプレスクールの生徒に日本の昔話を読み聞かせ、テーマに沿ったワークをしたり、小学校 6 年生の生徒にオノマトペを教えました。日本文化の授業では、神道と日本文化の結びつきについてジブリ映画を用いて解説する、工作においては身近にある材料を使ってけん玉を作る授業を実施しました。音楽の授業では、日本で歌い継がれる童謡を紹介し生徒みんなで歌いました。どの授業でも監督の先生から細かいフィードバックをもらい、より良い授業ができるように親身になって一緒に考えてくださいました。また色々な先生から「私のクラスにも授業に来て欲しい」と言っていただきました。生徒に日本のことを新しく学んで欲しいと考えていたのですが、「私も第二の生徒として今日はあなたから日本語や日本文化を学びたい」と言ってくださったとき、自分の授業スタイルやスキルが風化しないよう何歳になっても生徒や実習生から学ぼうとするその謙虚な姿勢こそが、フィンランドの教師の質をより高いものに行っているのだと実感しました。

以上のようなフィンランドの教師の特徴と比較すると日本の教師の問題点が浮き彫りにされます。一つ目は、教師の学ぶ姿勢についてです。日本で教育実習をしていて、いつまでも同じスタイルに固執して生徒や時代のニーズを考えずに授業をしている先生が多いたことから、学び続けることは決して簡単なことではないのだと改めて感じました。二つ目は教師の精神的な余裕についてです。日本での教育実習中、たくさんの机がぎゅうぎゅう詰めに並ぶ狭い職員室に漂う緊張感にいつも息苦しさを感じていました。時間にも規則にも細かく縛られていて、ゆっくとコーヒーを飲みながら同僚と話をするような暇もなく、日々の業務(時には丸付けなどの機械的な作業)に追われる余裕のない教師たちを見ていて、職場として理想的ではないと思っていました。フィンランドでは自発的学習を推進するため課題や宿題も少なく、その分先生の業務も減ります。そこを教材研究や生徒の理解の時間に充てるのですが、その時間をやりがいだと感じている先生が多いので、余裕のなさのようなものは感じられません。フィンランドの学校には日本の学校のような職員室はなく、代わりに談話室があり、教師同士がコーヒーを飲みながら、生徒たちのことについて話し合います。教師は一人一つ、もしくは複数人で一つの仕事部屋を持っているので多くのパーソナルスペースがあり、落ち着いて自分の仕事に集中できます。人が二人すれ違うことさえ困難な狭い日本の職員室では仕事効率も落ちてしまうだろうと感じました。教師はこれからの未来を担う子どもたちの人生の

一部を預かる大切なお仕事ですから、子どもたちの可能性を引き出す教師側の心の余裕が保証されなければならないと思いました。

【留学で得たことをどう活かすか】

日本の教育を変えるための第一歩として教師になることを夢見て留学をしましたが、フィンランドでの経験を通して、日本の教育を変えるためにはまず教師の現場を変えなければならないと強く思いました。働く人が心の余裕を持って、働きたいと思える場所を作る存在になるためにはどうすれば良いかを考え、行動に移したいと思っています。

【留学中の生活】

教育実習以外にも教育学や社会政策、言語、心理学の授業を履修し勉強に励みました。秋学期には各国の教育を比較する“Comparative Education”という授業を履修していましたが、ディスカッションが中心の慣れない授業に少し苦勞しました。言いたいことがあっても勇気が出ず、何も言えずじまいの日もたくさんありました。それを反省し、春学期に履修した“Finnish social policy”という授業では日本の現状を踏まえながら社会政策に対する意見を述べるできるようになりました。日本の大学の授業制度で大きく違うのは、フィンランドではコマ数や単位数が選択する授業によって変わってくるということです。何曜日の何限といった割り当てがなされているわけではなく、2週間で終わってしまうような短期集中型のものであれば、セメスター中は一定間隔で授業があるものなど種類は様々です。その柔軟なスケジュールのおかげで空いた時間を勉強以外に友達との交流や旅行、趣味にも費やすことができました。特にストレスを発散する方法として音楽はとても有効でした。Ritz と呼ばれるバーで毎月ジャズの弾き語りを披露したり、博士課程の学生の討論会の前座としてクラシックを演奏させてもらったりしました。小学校が開催するクリスマスキャロルで、クリスマスソングを演奏したりもしました。自分で音楽プロジェクトを作り、留学生的協力のもと“Multi-language challenge”という名前で一つの動画を作り上げたりもしました。さらに、フィンランドの学生コーラス団体 Pedavoces に飛び込み、5ヶ月間その一員として一生懸命活動しました。音楽が引き合わせてくれた本当に素晴らしい出会いがたくさんありました。特にそのメンバーである一人の学生との出会いは私の留学生生活をさらに充実したものにしてくれました。彼女と生活を共にし始めてから私の英語力はぐんと伸びましたし、寝る間も惜しんでお互いのことや好きなことについて、時には教育の話や心理学の話をするたびに「幸せだ」と感じていました。

【これから留学を考えている人へ】

フィンランドへ留学しようと考えているあなたへ。私がお勧めする最高の留学先です。フィンランド人と関わりを持って思ったことは、地理や文化、歴史は違うけれど、彼らは日本人と似ているなということです。彼らは一人の時間がとても好きです。とても誠実で、時間や約束をきちんと守ります。自己主張はあまり得意ではなく、控えめです。寒く厳しい冬を越えなければならないため、とても我慢強いです。客人にはお茶とお菓子を出して手厚くもてなす、温かい心を持っています。フィンランド人と触れ合うと、まるで日本人と話をしている気分になるほど、安心感を覚えます。フィンランドは日本人が暮らすのに最適な場所だと自信

を持って断言できます。そんな彼らが私の周りにいてくれたことで、人間関係に悩むこともほとんどなく、自分のしたいことに一生懸命になれたからです。しかし、日本から出て他の文化と関わりを持つと、小さかれ大きかれ人間関係の壁というものに誰しも出会うものだと思います。それを経験し乗り越えた時の喜びや達成感は何物にも代えがたい自分の糧となります。そしてその壁の先に、あなたを待っているさらに素晴らしい出会いがあります。素晴らしい出会いによって、あなたは何度でも生まれ変わることができます。自分のパッションに正直になってください。自分に嘘をつかず、小さいことであってもチャレンジしてみてください。その情熱に惹かれてあなたの周りに自ずと人が集まります。自分の心の声に耳を傾け、あなたが目指す場所へ、一歩踏み出してみてください。